

科学人

南宮 湖 Namkoong Ho

慶應義塾大学医学部 感染症学教室 専任講師

Profile

韓国籍、東京都出身。2015年慶應義塾大学大学院医学研究科博士課程所定単位取得退学。博士(医学)。同大学院予防医療センター助教、永寿総合病院呼吸器内科、米国立アレルギー・感染症研究所博士研究員などを経て、21年より現職。同年よりさきがけ研究者。



パンデミック後、初の海外旅行。家族とかけがえのないひとときを過ごすことができました。

Q1. 感染症学の道へ進んだきっかけは？

A1. 国際保健や公衆衛生に関心 途上国で学ぶ医師の姿に決意

「人の役に立ちたい」と思い、医学部に進学しました。その中でも国際保健や公衆衛生に関心があり、勉強する中で感染症と国際保健は切っても切れない関係があると感じ、感染症分野に強い興味を持つようになりました。

志が具体化したのは、医学部5年次に大学を1年間休学し、南インドの病院で4カ月の研修に参加した時です。そこでは、色々な資源が不足している環境下でも、若くて優秀な医師たちが新しい知識や技術の習得に情熱を傾け、必死で学んでいました。その姿を見て「専門分野を持ち、その知識や技術を人に伝え、共同研究を行うことも立派な国際保健への貢献ではないか」という考えにたどり着き、研究の道に進むことを決めました。

Q2. 新型コロナとの関わりは？

A2. コロナ制圧タスクフォースで「調整役」 大流行に耐え得る研究体制へ

米国立アレルギー・感染症研究所への留学中にコロナ禍によるロックダウンが起こり、研究の中断を余儀なくされました。そんな中、慶應義塾大学で「新型コロナウイルス感染症のホストゲノム研究」を目的とした研究グループが立ち上がることになり、メンバーに志願しました。

コロナ制圧タスクフォースは、さまざま

な分野の約500人の研究者、100以上の大学・研究機関が参加する研究ネットワークです。私は、全体のマネジメントを行う「調整役」を務めています。EDCと呼ばれる、臨床研究のデータを電子化した情報システムの構築をはじめ、臨床現場で取得される患者検体の管理や、研究者・社会への情報発信、研究者からの質問や相談などに対応していました。

コロナ禍では、医療現場の疲弊や研究者間の情報共有不足により、日本の研究成果が少ないことが社会的に批判を浴びました。これを繰り返さないためには、平時からパンデミックに耐え得る研究体制を構築すること、医療従事者にとって研究参加が負担にならず、支援につながる仕組みを作ることが必要不可欠です。

「上から目線」の多施設共同研究ではなく、患者さん、研究者、医療従事者、そして社会の「共感」に根差したボトムアップ型の研究体制を構築すべきだと思います。さきがけの研究では、公平性と透明性を担保しつつ、有限な医療資源をいかに効率よく価値あるものにするか、コロナ制圧タスクフォースに関わる中で自分の中で浮かんだ研究アイデアを実践しています。

Q3. これから研究者を目指す人に一言

A3. 対話や交流通じ度胸と経験を 社会とつながる研究と一緒に

近年は研究者1人だけでなく、多くの人と協力して成果を出すことが増えていると感じます。そのためにも、学生の頃から自分の専門以外の人とつながる経験が大切です。海外に出かけ、見聞を広げること重要です。さまざまな人たちと対話や交流を続けることで、度胸と経験を手に入れてください。

パンデミックはまた必ずやって来ると言われています。これに対して、過去の経験から学び「今の自分に何ができるのか」を考え、日々努力することを心がけています。感染症の研究は、医療・研究を通じて社会とつながることができ、非常に楽しくやりがいのあるものです。この記事を読んでいる方で、将来感染症の分野に進む方がいたら、ぜひ一緒に研究しましょう。

(TEXT:片柳和之)



豪州のプリズベンで開催された国際会議では、非結核性抗酸菌症に関する研究のプレゼンテーションに臨みました。

次のパンデミックの時に社会により貢献できる研究を目指して

